

論文

赤ちゃん人形を媒介した認知症高齢者とのコミュニケーション

——セッション場面における言動の分析——

畑野相子*

I はじめに

本研究の目的は、認知症高齢者と赤ちゃん人形（以下人形とする）を媒介したコミュニケーションの過程を分析し、その特徴を明らかにすることである。

認知症の発症率は加齢と共に高くなる。2013年6月1日付の新聞において、2012年における認知症の発症率は65歳以上人口の15%で推計462万人、MCI（Mild Cognitive Impairment: 軽度認知障害）は約400万人であると報道された（厚生労働省研究班、代表浅田隆）。

認知症とは、発達した過程で獲得した知能、記憶、判断力、理解力、抽象能力、言語、行為能力、認識、見当識、感情、意欲、性格などの諸々の精神機能が脳の器質的障害によって障害され独立した日常生活・社会生活や円滑な人間関係を営めなくなった状態をいう（医学大辞典 第19版）。DSM-V（アメリカ精神医学会による診断基準）では、そこに社会的認知が付加された。中核症状は記憶機能と認知機能の障害であり、BPSD（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia）が出現するとよりコミュニケーションが難しくなる（認知症ケア学会2011）。認知症の人に限らず人間が生きていく上でコミュニケーションは不可欠であり、それが断たれると人間は孤立感や失望感を感じる。

一度獲得したことばの「伝える」機能を失った認知症の人とのかかわりにおいては、五官（感覚受容器官）と感受される五感の生理的な共通性や個人的意味を有するモノなどが「伝わり」に大きな役割を果たす（山根1998）。具体的には、①五感の生理的共通性を基盤とする具体的な身体感覚、②共に活動を行うことでえられる共通体験、③それぞれの生活史を通じた類似体験などがコミュニケーションの基盤となる。言葉以外に①言葉の表情にあたるリズムや調子、②からだの表情にあたる視線や動作や行為、③拡張した自我にあたるモノの扱いなどが意味記号として機能するためコミュニケーションが容易になる（山根1999）。

認知症ケアに「モノ」を媒介した研究としてはアニマル療法やロボット療法等があるが、ここでは人形療法に視点をあてその過程を検討した。人形療法はダイバーショナルセラピー（1990年頃オーストラリアの介護現場で蓄積されたもので、日本では気晴らし療法と訳されている）の一つとして我が国に紹介された。2001年6月にNHK番組「関西クローズアップ現代」で、人形を抱いた高齢者が活き活きとした自分を取り戻している姿が放映され、人形療法に対する関心が一挙に高まった。芹沢は著書の冒頭に「信じられない・・・どうしてこんな人形が?」「夜勤の看護師たちは目を疑った。夜になるといつも大声で泣いて家族の名を呼び、掛布団を投げ捨てるなど強い不安や混乱状態となる八重子さん（仮名）が、その日は静かに眠っていた。腕にはしっかりと赤ちゃん人形が抱かれている」と書き出し、人形を通して出会った事例を紹介している（芹沢2003）。しかし、人形療法に関する研究報告は2001年から年に約1本にとどまっている。最も古い研究では、3体のシリコン製人形に対する認知症高齢者の態度を観察し「かわいいから触りたい」という感情と言動を認めたと報告している（田村ら2001）。療養病棟に入院中の認知症

キーワード：認知症、コミュニケーション、赤ちゃん人形

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2013年度入学 公共領域

患者6名を対象に本物に近いシンプルな人形を用いた研究では、子育て時代の記憶を想起させ、疑似的に再体験させることで精神的な安定につながったと報告している（早田ら 2003）。アルツハイマー病の高齢者にドールセラピーを導入した事例研究では、徘徊や入浴拒否、帰宅願望などが減少したと報告している（永幡ら 2004, Leah Bisiani 2004）。人形を抱いて生活していた認知症高齢者の介護者から人形の意味を聞きとった研究では「老いによる様々な喪失を、生きてきた証としてつなぎとめる役割としての人形があった」と述べている（親松ら 2006）。人形療法で暴言や暴力が緩和した事例分析では「世話をする」「育てる」という母親役割を人形に移行して再現することで欲求が満たされ精神的安寧につながったと考察している（畑野ら 2010）。高尾らは赤ちゃん人形の子守をすることで役割を獲得し BPSD が減少した事例を報告している（高尾 2012）。

これらの研究から認知症高齢者の変化をアウトカムとした人形療法の効果は示されている。効果の背景には何らかの形でコミュニケーションが成立したと思われるが、その視点での分析はされていない。そこで、本研究では人形を媒介した認知症高齢者とのコミュニケーションの過程を振り返り、その特徴を明らかにする。

II 研究方法

認知症高齢者2事例を対象とし、人形を媒介したコミュニケーションを図った。対象のリクルート方法は、グループホームと介護老人福祉施設の長に研究の同意を得て対象の選定を依頼した。用いた人形は5体（NO1～NO5とする）で、大きさは35cm～50cm、重さは1kg～1.5kg、素材は布製と樹脂製、目は開閉可能と開のみと閉のみ、硬さは硬と軟、顎定しているものとしていないもの、座位可能なものとそうでないもので個々の特徴を表1と図1に示した。5体の中から好みの人形を選んでもらいそれを用いた。

援助者（ここでは対象者を担当する施設の職員を示す）または研究者が人形を媒介してコミュニケーションを図り、対象者の表情、発言内容、態度と援助者がフィードバックした内容をデータとした。データ収集は研究者または研究協力者が参加観察し、フィールドノートに記録するとともに写真撮影した。

セッションの頻度は1～2週間に1回、時間は30分程度で長くても1時間を超えないようにした。得られたデータを記述し、事例毎の分析と2事例の共通性から人形を媒介した認知症高齢者のコミュニケーションの特徴を考察した。



図1 用いた人形
(向かって左から順に NO1. NO2. NO3. NO4. NO5 とした)

表1 人形の特徴

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5
大きさ	50cm	50cm	35cm	50cm	35cm
重さ	1.5kg	1.5kg	1Kg	1.5kg	1Kg
顔	和風	和風	リアル	リアル	洋風
目	開	閉	開閉	開閉	開
固さ	軟	軟	固い	固い	固い
顎定	不可	不可	可	可	可
座位	不可	不可	可	可	可
本体	布	布	樹脂	樹脂	樹脂

III 倫理的配慮

本人と家族に文書と口頭で研究の目的、方法、自由意思による参加、研究の危険性（人形との共生関係が強くなると他者を排斥する可能性がある）、不参加による不利益からの保護とプライバシーを保証し同意を得た。実施に当たっては研究者が所属する機関の倫理審査委員会の承認を得た。

Ⅳ 結果

5体の人形を提示したところ、NO2は寝ている、NO5は怖い顔しているという理由で不人気だったので、実際には3体を用いた。

【事例1－暴言・暴力が激しかったAさん】

Aさんは80歳代の女性。4人姉妹の末っ子で家族に愛されて育った。配偶者が早くに死亡し子どもに恵まれなかった。配偶者の死亡後は一人暮らしをしていたが、認知症を発症しグループホームに入居した。ADL（Activity of Daily Living: 日常生活動作）は自立しており認知症の程度は中等度であった。日常生活において笑顔はほとんど見られず、他の入居者が同じ言動を繰り返すと大声で怒った。特に、うめくような声を出す男性に対して「うるさい。くそじじい。何処かへ行け」と大声で罵倒し、ユニット全体の空気を悪くしていた。また、診察時に嘱託医の髪を引っ張り前腕に爪を立ててひっかくなどの行為があった。2008年7月から2011年7月まで介入した。

(1) 開始から1か月間の状況

人形を男児に見立て世話をする態度を示した。

人形を媒介したAさんとの会話	援助者の受け止めと発信
「どの人形が好きですか」と人形を提示すると、「この子がかわいい。目がかわいい」と言ってNO3を選んだ。人形を抱いて手の指を1本2本と数え「5本あった。良かった」と笑顔で語った。「良かったですね。五体満足で」と返答すると「良かった」と言ってこれを繰り返し、足の指も数え始めた。	手足の指を数えて、確認する姿から、五体満足に関心があると受け止め、「元気でよかったですね」「かわいい子ですね」という会話を繰り返した。
「この子は男の子ですか、女の子ですか」と尋ねると「ボンヤ」と返答があり、「NO4が兄貴でNO3が弟」と言った。「女の子に見えませんか」と尋ねるも、一貫して男児との返答だった。	男児と断言するところから、男児に意味を置いていると受け止め「可愛い男の子ですね」と男児にみたてた会話になった。
人形の顔に触れ肩をとんとん叩き、あたかも赤ちゃんにするように目を見てうなずいていた。「目をつむるのがかわいいですね」と語りかけると「目はつむっていない。いつも開いている。いい子や」と言った。人形の足に触れ「大きな足や。ちょちょしたろか」とくすぐり「ちょちょしても知らん顔しているわ」「何か言ってくれたらいいのに」と語った。	人形と認識し、赤ちゃんに見立てていとおしく思っている気持ちが伝わってきた。「かわいいですね」とAさんの気持ちに沿い、一緒に人形を可愛がる場面を共有した。
Aさんはトイレに行く時「この子はおしっこで一へんでよいけど、おばばはおしっこが出るから大変や。あんたにおしっこが出たら大変やけど。待っててや、おしっこに行ってくるからな」と語りかけた。援助者は「子守りしていますからゆっくり行ってきてください」と返答した。トイレからもどり人形の横に座り「良い子にしてたか」と語りかけたので「いい子でしたよ」と返答すると「そうか」と言った。他の入居者が机に足をあげるのを見て「そんな所に足をあげたらあかん。いくらなんでも女やのに」と言い、「なあーあんたはいい子や。足もちゃんとしているし」と人形に語りかけた。	人形だからおしっこをしないと認識している。子どもにみたて対応している気持ちを受け止め「この子は悪さもしないしいですね」と人形であることを前提に会話した。

(2) 1か月～3か月の状況

1か月が経過した頃から罵倒の対象になっていた男性がうめいても、Aさんは「うるさいな」とは言うが以前のように大声で罵倒しなくなった。3か月が経過した頃から罵倒も暴言もなくなった。人形に対しては、男児に見立てて世話をする態度を示した

人形を媒介したAさんとの会話	援助者の受け止めと発信
Aさんは人形をみて「2週間も同じ服着ていたら汗かくよ」と語りかけた。援助者は「そうですね。着替えが必要ですね」「この子の服作りましょうか」と返した。	季節を話題にした会話ができ、かわかりがしやすくなった。タオルケットを準備した。

(3) 3か月～6か月の状況

子育てをしたかった感情の吐露が見られた。

人形を媒介したAさんとの会話	援助者の受け止めと発信
「人形に名前を付けましょうか」と援助者が言うと「タローがいい」と男児の名前を付けた。「タローちゃんですか。いい名前ですね」と言うと、「いい子や、いい子や」と繰り返した。	名前は変化したが、いずれも男児をイメージした名前ばかりだった。男児への関心の強さが伝わってきた。「タローちゃん」の愛称での会話をした。
12月になり援助者が「寒いので靴下と布団を準備しました」と言うと、Aさんは人形に靴下をはかせ布団に寝かせつける態度が見られた。「あんたはいい子やな」「ねんねしいな」「おばばはバカになってしまったが、あんたはかしこい子や」などの発言を繰り返した。人形をあやしなながら「子どもにこんなことをしてやりたかった」「話してくれたらいいのに」と語った。	援助者は、子育てに対する思いを初めて知った。「Aさんにかわいがってもらってこの子も幸せですね」とAさんの気持を後押しするような会話をした。

(4) 6か月～1年間の状況

Aさんは発熱し入院した。病院でほとんど話さないの看護師はコミュニケーションがとれず困っていたが、人形を媒介してコミュニケーションが成立した。

人形を媒介したAさんとの会話	援助者の受け止めと発信
援助者が「この子も心配しているで」とNO3を持って見舞いに行くと「お一來たか。良い子やな」と笑顔になった。看護師は、訪室時「可愛いですね」と人形を媒介して話しかけるとAさんは笑顔になり会話がしやすくなったと語った。	看護師は、人形がAさんの大事にしているものであるとわかり、それを話題にかかわりをもった。
1年が経過した頃に健康診断があった。Aさんは嘱託医の名札を見て「この字はなんて読むんや。難しい名前やな。ここの人とは違うな。どこから来てるんや」と話しかけた。嘱託医は「〇〇から来ています」と普通に答えた。	Aさんの変化に嘱託医は驚き「なぜこんなに変化したのか」と関心を示した。

(5) その後の状況

Aさんと同じユニットのBさんは、ADLも自立しておりできることも多いことからその力を伸ばしたいと職員(ここでは援助者を含む職員全体を示す)は考えていたが、自室に閉じこもりがちだった。徐々にBさんは人形を可愛がっているAさんに関心を示し、そばに座るようになった。AさんはNO3を抱き、Bさんは別の人形を持って2人が会話するようになった。Bさんはデイホールにいる時間が長くなり生活範囲が拡大した。

約5年経過した現在もAさんは、人形をかわいがり暴言はなく笑顔での生活が継続している。

人形を媒介したAさんとの会話	援助者の受け止めと発信
Aさんは「寒いので、布団のまま起こした」と布団にくるんだまま人形を抱いた。Bさんは「私の人形は服1枚」といった。「お部屋が暖かいから大丈夫ですよ」と言うと「そうやな」と語った。	2人で会話している時は見守るようにした。AさんがBさんに聞いてもらっている関係だった。怒る時や聞き流している時もあった。
人形と視線を合わせ「この子がじっと見てくれる。私だけをじっと見てくれる」と得意そうに話した。「私の方も見てよ」と援助者が人形に言う「あかん、私だけやな～」と人形と視線を合わせ語りかけた。	視線を合わせることで自分を見つめてくれる存在を確認し、その喜びが伝わってきた。Aさんの気持ちに寄り添った会話をした。

【事例2 一妻の暴力のため同施設で別々に生活していた夫婦】

夫は90歳代、妻は80歳代の夫婦で介護老人福祉施設に入所し、妻が夫に暴力を振るうため別々のフロアで生活していた。夫の認知症高齢者自立度はⅢb(夜間も日常生活に支障をきたす状態で介護が必要)で、ADLは杖歩行、食事と整容と排泄は自立、入浴は一部介助であった。夫は調理師を54歳で辞めその後妻と農業を営んでいた。いつも柔和な表情をしておりデイルームで過ごすことが多かった。

妻の認知症高齢者自立度もⅢbで、ADLは歩行器使用、食事と整容と排泄は自立、入浴は一部介助であった。肩や膝の痛みなどの不定愁訴が多く、常に眉間にしわをよせ不機嫌そうな表情をし、自室で過ごすことが多かった。夫が会いに来ないと訴えるが夫婦が一緒にいる場では、妻が夫を杖でたたきすぐ喧嘩になった。家族と一緒に居ると喧嘩になるのでこのままでいいと言っていたが、職員は夫婦同室で生活してほしいと考えていた。

夫婦には男児1人と女児2人が生まれたが、男児は腸閉塞で乳児期に死亡していた。キーパーソンは次女で頻りに面会に来ており、次女について、妻は「目が大きく、まつげが長かった」とよく話した。2009年5月から2011年4月まで介入した。

セッションの頻度は平均2週間に1回で総計23回、時間は平均30分だった。セッションは、妻のみを対象とした第1段階(1～3回)、夫婦と一緒に居る場をつくり夫婦それぞれを対象とした第2段階(4～7回)、外出などと併行して夫婦を対象にした第3段階(8～12回)、夫婦同室での生活が始まり夫婦を対象とした第4段階(13～19回)、夫婦を基盤に他の入所者も対象とした第5段階(20～23回)に分けられた。人形はセッションの時のみ使った。

(1) 第1段階のコミュニケーションの実際

人形を媒介した妻との会話	援助者の受け止めと発信
<p>【1回目】NO3とNO4を持って訪室し、「かわいい子を見てください」と語りかけた。妻は「かわいい」と言ってNO4を胸に抱えて頭をなでた。「足が冷たい」と言ってさすり「お目目開いておばあちゃんと言って」と話しかけた。「可愛いですね」と相槌を打つと「こんな子が欲しい」「足が丈夫なら世話してあげたい」とあやした。そして「長男を亡くした」と話したので「大変でしたね」と言う。「娘があんじょうしてくれる」と言った。「夫が会いに来てくれない」と言うので「どんなご主人ですか」と聞くと「お父さんは財産が一銭もない所から家を建てた。酒もタバコもすわない真面目な人や」と語った</p>	<p>人形に対する反応や言葉を繰り返して問うような会話になった。 終始笑顔だった 「お父さん」は夫をさしている時と父親をさしている時があり混同していた。</p>
<p>【2回目】NO4を持って訪室し、「赤ちゃんを連れてきました」と語りかけた。「かわいい」と目の周囲に触れ「この子男の子やな。うちも男の子産んだけど、腸閉塞で亡くした」と話した。「つらかったですね」と返答すると「今は娘があんじょうしてくれる。病院に行く時に手を引いてくれる」と語り「こんな子が欲しいけれど、世話が大変」と語った。夫について「5か月も会いに来てくれない」「淋しい。もう離婚や。若いのがいいんやろ」「家に帰りたい」と語った。</p>	<p>男児を亡くした話はするが、悲しみの感情の表出ではなかった。娘の話と在宅生活についての話をした。</p>
<p>【3回目】NO3とNO4を持って訪室し、「どっちがかわいいですか」と語りかけた。「どっちもかわいい」と言うがNO4の頭をなで、胸に抱き、頬に触りあやす言動を繰り返した。男の子を産んだが腸閉塞で亡くした話と今は娘が良くしてくれる話を繰り返した。人形を座らせて「苦労して生きとくない」と語ったので「苦労されたのですか」と尋ねると「母親が代わって淋しかった」「義母は恐かったけれど習い事をさせてくれた」と話した。夫は誰にでも優しい人や」といった。</p>	<p>義母に対する思いを語ってもらうなど子ども時代の話をした。笑顔で話した。</p>

(2) 第2段階におけるコミュニケーションの実際

人形を媒介した夫と妻との会話	援助者の受け止めと発信
<p>【4回目】妻にNO4、夫に別の人形を渡し「連れてきました」と語りかけた。妻は人形を大事そうに抱いた。夫は「かわいい」と言って抱き頬や口にチューをした。その様子を見て、妻は「汚い」と怒った。夫は子どもの世話をしてくれたのかと妻に問うと「1回も世話などしてくれたことない」との返答だった。</p>	<p>夫の人形に対する反応から子煩悩さが窺えたので、夫婦の子育てを話題にした。</p>
<p>【5回目】男児を連想しないようにNO4に赤い着物を着せて夫婦の間に置き「かわいいでしょう」と語りかけた。妻は「かわいいな、私のことじっと見ている」「赤い服を着ているが男の顔や」と言った。夫も「かわいい」と言って頬に触った。「なんて言う名前ですか」と聞くも返答なし。援助者が「まさお君かな」と言う。「まさお」と呼んであやした。「お父さん優しいですね」と言う。「うちの父さんは大きな声出したことない。怒鳴られたこともたかされたこともない。私の方が、ぎゃあぎゃあいうの」と妻は語った。</p>	<p>夫にちなんだ名前をつけ、夫への思いを引き出す会話をした。妻も夫に対する思いを語った。</p>

<p>【6回目】NO4を持って訪室。妻は不定愁訴が多かったがNO4を見ると表情が和らぎ「かわいい」を連発した。しかし、女性職員に手引きしてもらって浴室に向かう夫の姿を見て、妻は「若い女と手をつないでいる」とヒステリックになった。その後「夫に見舞いに来て欲しい」と気持ちを語った。援助者が「お父さんに見舞いに来てくれるよう言っておきます」と言うと、はにかむ様子が見られた。子どもが死亡した話にはならなかった</p>	<p>妻の前で手引き歩行していた事が、夫が浮気をしていると思わせた原因であると判明した。手引き歩行時の配慮が欠けていたことに気付いた</p>
<p>【7回目】外出し、NO4を渡し「この子もいますよ」と語りかけた。妻は「長い睫毛して、目が大きい。かわいい」と言ってずっと抱き、足に触れ「冷たい」とさすっていた。「かわいいですね」と語りかけるとにこにこし、「お父さんもきたらよかったのに」と語った</p>	<p>外での昼食は、普段の摂取量より多かった。終始笑顔だった。ここでも夫への気持ちが語られた。</p>

(3) 第3段階におけるコミュニケーションの実際

人形を媒介した妻との会話	援助者の受け止めと発信
<p>【8回目】「連れてきました」NO4を渡した。いつも通りのかわいがる態度を示した。「名前付けましょうか」と言うと「Gちゃん」(次女の名前)と応えた。「よい名前ですね」と言うときながら抱いていた。夫は横から人形の頬をつついていた。人形を抱き、顔を眺めながら「大きい目をしている。長いまつげして、うちの下の娘も長かった」と語った。</p>	<p>夫が人形に触れても妻は怒らなかった。人形を見ると娘の話になることから家族意識を強化する意味で夫婦とNO4が写った写真を妻の部屋に貼った。</p>
<p>【9回目】NO4を持って訪室すると、妻は横になっていた。「この子の名前覚えていますか」と話しかけると、少し考えて「Gペ・G・Gちゃん」と返答した。「寒いやろう」と布団の中に入れ一緒に寝て「しゃべる相手がいなかったから淋しかった」「話していると気が紛れる」と語った。夫について「うちの人、ひとつも見舞いに来てくれへん」と訴えた。援助者が夫に伝えておくと、照れ笑いしながら「かまへん」と語った。</p>	<p>不定愁訴が多く気分転換を勧めるも拒否。「この子といると気が紛れる」というので、しばらく人形の話をして一緒にいた。</p>
<p>【10回目】ダイルムにNO4を持って行き「この子の名前覚えていますか」と語りかけた。妻は「わからん」と言いながらも少し考えて「Gちゃん」と返答し、「冷たい」と足をさすった。援助者が人形をテーブルの上に座らせると「上手に座って」と言って服の乱れを直した。他の入居者が人形を抱いても怒ることなく眺めていた。</p>	<p>人形を中心にして周囲の人にも話しかけた。「かわいい」という言葉のやりとりとなった。</p>
<p>【11回】「連れてきましたよ」NO1とNO3とNO4を渡した。妻は「あー来たの」と言ってNO4を抱いた。夫はNO3を抱き、その様子を見て妻は「お父さんとここにいる」と言って微笑んだ。夫はすぐ机の上に置いたのでNO4だけにすると、夫婦と一緒に人形を眺めた。夫は「これ大きくなったら、えらいことやで」と言うと、妻は「大きくならへんかったら化け物やで」と語り、子どもについて「小さいとき死んだんや、生きていたら大きくなったやろうね」と話した。夫は横でうなずいていた。</p>	<p>夫婦の会話ができるようになった。援助者は夫婦の会話を引き出すように語りかけた。</p>

(4) 第4段階におけるコミュニケーションの実際

人形を媒介した夫婦との会話	援助者の受け止めと発信
<p>【12回目】スーパーへ買い物に行く車の中でNO1とNO4を渡した。妻は「あー来たの。おばあちゃんとおいで」とNO4を抱き「あー寒かったやろ」と足をなでた。NO1に対して「この子、毛が3本で寒そうや」と言った。店内では妻の車椅子を夫が押した。飲み物の希望を尋ねると「温かいのがいいなーお父さん」と夫に語りかけ、夫は「何でもいい」と応えた。食事の時、妻は「お腹すいたね」と語りかけ「お茶あるか、お父さんこれ食べ」と夫の世話をやいた。「金なかったけれどこの人優しいからやってこれた。酒もタバコもしない」と繰り返した</p>	<p>妻は「ここの支払い大丈夫ですか？」とお金の心配をした。「お父さん楽しかったね」とご機嫌であった。「やさしいですね」と夫婦の気持ちを引き出すよう話かけた。セッション開始7ヵ月後に夫婦同室の生活を始めた。</p>
<p>【13・14回目】NO4を持って訪室すると、妻はベッドに横になっていた。「この子覚えていますか」と話しかけると「もう忘れた。あかん」と言い、少し考えて「Gちゃん」と応えた。「大きいお目目をして」と言って抱き、娘も目が大きかったと語り、しばらく一緒に寝た。夫は人形を「けんぼう」と呼んでいた。</p>	<p>娘を回想した話題になった。淋しそうな表情だったが笑顔が見られた</p>

<p>【15回目】 デイルームに夫婦が並んで座っている場にNO4を持って行った。妻は笑顔になり「お父さん、この子かわいいね」と言い「寒い」と手足をさすり大事そうに抱いた。夫は隣でうとうとしながら人形の頬に触った。妻が人形に夫の名前を付けたので「女の子じゃないんですか」と問うと「男の子」と言った。しばらく抱いていたが「重い」と人形を置いた。夫婦がソファに座り、妻は「この子かわいいね」と夫に笑顔で話しかけた。</p>	<p>夫婦喧嘩にはならなかった。人形をかわいいという夫婦の気持ちを受け止め、夫婦の会話を促すようにした。</p>
<p>【16回目】 NO4を持って訪室すると、妻は手足が痛いといいながらもあやした。「寒かろう」と毛布でくるんで寝かせ「つぶさへんかな」と心配そうに語った。</p>	<p>世話をする妻の気持ちを受け止める会話をした。</p>
<p>【17回目】「連れてきました」と言ってデイルームにいた夫婦の横にNO4を置いた。夫婦で「ほらほら」とあやし、夫が人形の頬に触ると、妻は夫の頬に触り「ざらざらや」と言った。「男の子産んでよかった。死んだけれど」と語り、人形に夫の名前を付けて呼んでいた。</p>	<p>夫婦間の感情交流が生じていることを受け止め、人形の名前を呼んで会話をした。</p>
<p>【18回目】 妻が体調を崩し救急車で受診した数日後に、NO4を持って訪室した。いつものように抱かず「お父さん、男の子がほしかったんやろ」と語った。夫は「顔色悪いな。具合悪いんか」と声かけしていた。妻が受診した後、「どこへいったんや。わしは寝ているしかできひんのやな」と言っていた。</p>	<p>妻は体調不良で人形への接触はなかった。夫婦がお互いに気遣いあう関係を受け止め、「早く良くなってね」と語りかけた。</p>
<p>【19回目】 妻は体調不良だったので、夫と共にNO4を持って訪室した。妻は人形を抱かなかった。援助者が足をこそばってみせると、妻は「こそばゆいよ」と言った。夫が「がんばれよ」と言うとお父さんもがんばってね」と夫の肩をたたいた。</p>	<p>体調不良時は、人形への感情表出は困難であることを受け止め、人形を使って心の安寧を図るかわりをした。</p>

(5) 第5段階におけるコミュニケーションの実際

人形を媒介した夫婦との会話	援助者の受け止めと発信
<p>【20・21回目】 NO1とNO4をデイルームに持って行き、「連れてきました」と語りかけた。妻は「どうしたの」とNO4を抱いてあやした。名前を尋ねると「わからない」と言うが夫の名前を付けて呼んでいた。夫を指して「お父さんは〇〇、この人は△△、私は××、ややこしいなー」と語った。NO1をみて「この子髪の毛ないな。お父さんもないのよ」と話した。</p>	<p>人形を通して夫への気持ちが語られていると受け止めた。 初めてユーモアが聞け、心の穏やかさを感じた。</p>
<p>【22・23回目】 デイルームにNO4を持っていくと、妻は人形を引き寄せ「寒くないか」と手足を温め、夫は横から頬にさわった。妻は「大きい目をしている。長い睫毛している。娘も睫毛が長かった。娘は2人とも片付いている。今は楽しせてもらっている」と語った。 昼食時、妻はおしぼりで箸を拭いて夫に渡し、妻の配膳が先になると「お父さんのはまだ？」と言い、「お父さんにお茶入れてあげて」と世話をやいた。花火大会があり夫婦で参加した。夫は妻の後ろに手を回し、妻は夫の膝に手を置いていた。</p>	<p>娘に対する感謝の気持ちと受け止め、「よい娘さんですね」と娘を話題にした。</p>

V 考察

暴言・暴力が出現していた認知症高齢者とのコミュニケーションの過程からその特徴について考察する。

1. コミュニケーションにおいて伝達されたこと

対象者に直接気持ちを尋ねることができないことから、感情の考察にMSSB (MacArthur Story Stem Battery: 人形遊びを介して子どもの心を知る技法) を参考にした。MSSBとは人形遊び技法 (doll play technique) と呼ばれる子どもの心の探究法で、人形を使って日常でも生じやすいジレンマや葛藤場面を作り出し、その続きを子どもに作らせるというものである (石谷 2012)。MSSBでは話の出だし (story stem) を子どもに提示しその続きを子どもが作ることを求めるものであるが、本研究では対象者が人形を目の前にした時、どのような話を展開するのか、人形に対する接し方や表情から感情を評価した。

(1) 赤ちゃん人形の形態を通して伝達された感情

事例1は人形を男児に見立て、指の本数を数えて五体満足を喜び、本物の子どもにするように話しかけ、抱いたり寝かせたりと世話をする言動がみられ、これがセッションの全過程に一貫して繰り返されている。「トイレに行くから、良い子にしていや」という発言は、幼い子どもに「待つこと」を納得するように伝える親によく見かける姿であり「こんな子育てがしたかった」という発言は子育ての欲求そのものであり、「話してくれたらいいのに」という発言は親としての働きかけに応答してほしい気持ちが窺える。人形の扱いは丁寧で笑顔で対応している。

事例1が結婚した頃の社会背景は、家意識が強く嫁には家の後継ぎとなる男児を産み育てる役割が期待されていた。その期待に対する感情コントロールは心身共に健康な時は可能であったが、認知症の発症に伴い感情のコントロールがうまくできず焦燥感が増し暴言となって露呈していたと考えられる（日本認知症ケア学会 2011）。人形を男児に見立て、母親として跡継ぎを育てるという仮想の世界を作り、子育ての喜びや楽しさを感じていたと推察される。笑顔で丁寧に人形を扱う対応は母親が子どもに接する対応そのものであり、子育てに対する感情表出と言える。

事例2では2つの感情の流れがある。第1は、妻が人形を男と認識すると腸閉塞で死亡した子どもの回想になる。つらい思い出というより「男児を産んだ、産んでよかった」という発言より男児を産んだことが満足感になっている。時代背景は事例1と同様で、男児を産むことが嫁に託された期待であったが故に、妻にとって男児出産は誇りであった。妻には悲哀の感情は窺えないが、「お父さんかわいそうだった」という発言は、男児死亡による夫の落胆が脳裏にあり夫を配慮する感情の表出と言える。第2は、目の大きさと睫毛の長さに着目すると次女の回想につながり、「かわいい、良くしてくれる」という発言になっている。これは感謝の気持ちと娘自慢と解釈でき、いずれの感情も妻の自尊感情を高めるように作用している。そして人形への対応は夫婦共に丁寧で、「寒かろう」と子どもをいたわる行為は全セッションを通して一貫している。「かわいい」「寒かろう」と世話をしており、事例1同様に「こっちをみて」と人形からの反応を求めている。子どもの世話をする行為は無償の愛であり、弱きものをいたわる優しさである。妻が表出していた感情は、男児を産んだ誇りとよくしてくれる娘に育てた自慢と夫や子どもの世話をしたい欲求と受け止めた。それが妻の自尊感情を肯定的に刺激し、老年期の発達課題である自我の統一に影響したと考える。

子育てに対する感情表出を可能したのは、媒介に用いた「モノ」が赤ちゃんを連想させる人形であったことにある。両事例とも、選んだ人形は自己の子育てに関する潜在意識と関連していた。人形の性別は対象者の感情により変化しているが、その判断の背景には意味があることが示唆された。

(2) 「抱く」という身体接触の意味

2事例とも一貫して「抱く」「直接人形に触れて世話をする」という身体接触の反応を示した。身体接触に関する研究では、Bowlbyが愛着行動という観点から幼少期の身体接触について研究し、身体接触が親子関係の絆を形成する上で重要で特に生後6か月間の身体接触が愛着形成にとって大切であると述べている。言語の未発達な幼児はコミュニケーションの手段として言語の代わりや補足に身体を使っている。塚崎は身体接触とことばは互いに影響し合っていると述べ、幼児期における身体接触の重要性について示唆している（塚崎ら 2004）。鯨岡らは「非言語的なコミュニケーションは気持ちをつなぎ合い、お互いの気持ちをわかり合うという点では、言語的コミュニケーションに劣らないどころか、むしろそれ以上の意義をもつものである」とし、幼児期においては言葉による言語的コミュニケーションよりも身体接触などのコミュニケーションの方が、他者と関係性を形成する上で重要な機能であると位置づけている（鯨岡 2001）。認知症はいったん獲得した知能が低下する進行性の病気であり、進行すると知的機能は幼児期までもどり言語をコミュニケーションの媒体として用いることがしづらくなる。それを補足するための手段として身体接触が重要な意味を持ち、幼児期のコミュニケーションのとり方と類似している。認知症の人の心理的ニーズをTom Kitwoodは、中心に愛（Love）をおき、それを取り囲む5辨の花びらとして、愛着（Attachment）慰め（Comfort）アイデンティティ（Identity）役割（Occupation）帰属意識（Inclusion）を挙げ、どれかが満たされると波及効果を及ぼし心の安寧につながるとしている（Tom Kitwood 2006）。人形を抱き世話をするなどの身体接触のコミュニケーションが言語を補足する意味を持ち、その結果アイデンティティと役割意識が刺激されたと思われる。その気持ちが援助者と共有されることによって交流が可能になり、穏やかさにつながったと推察する。

(3) 視線の重要性

目が閉眼している NO2 は不人気だった。両事例とも視線を合わせて話しかけ「私だけを見ている」と喜んでいる。これは、人形との間に視線の「見つめ・見つめられる」という双方向の関係を受け止めフィードバックしていることになる。表出対象を人物にした実験研究において、視線と感情表出の関係についてはネガティブな感情表出よりポジティブな感情表出の時に相手に対する視線量が多いことは証明されなかったが、強い感情表出の時には視線量が多くなったと報告されている（飯塚 1991）。感情を演技表出させる研究では、感情の種類（型）によって相手との EC（Eye Contact）が変化することを示し（Fromme & Schmidt 1972）、悲しみ、絶望、嘆きなどの感情状態では相手に視線を向けず、表情によって感情の型を判別する上で EC が有用な指標になると報告されている。このことから、じっと人形を見つめたことは感情表出が多く、その感情は怒りや恐れではなく快の感情を意味していると考えられる。

人形が開眼していることは、「見つめ・見つめられる関係」を形成する上で重要な意味を持ち、それに伴う感情は快の感情つながっていると思われる。しかし、視線を合わせ、その世界に没頭すると人形との共生関係が生じ他者を排除する危険性がある。自分に関心が向けられている感情を援助者と共有することが重要である。

(4) 同じ内容を繰り返すことの意味

事例 1 は男児がかわいいと世話をする言動を、事例 2 は「かわいい」「冷たい」と足をさする言動を一貫して繰り返している。援助者もそれを受け止め繰り返す形で対応している。認知症の人は環境の変化に適応しにくい。同じ内容の言動を繰り返すことで自分の気持ちが徐々に整理されていったと思われる。

(5) 名前を付ける

名前はいろいろ変更したが、2 事例とも人形に名前をつけた。名前を付けるということは、人形一般ではなく個性を意味する。事例 1 は男児の名前を付け、事例 2 は娘や夫と関連する名前を付けた。名前を付け個性を明確にすることでより感情表出が豊かになったと思われる。

2. コミュニケーションに人形が果たした役割

本研究では対象者に好みの人形を選んでもらった。事例 1 は NO3 を選び、男児をイメージして世話をしている。事例 2 は、目の大きさや睫毛の長さから NO4 を選んで世話をしている。箱庭における玩具の役割は「玩具は、クライアントの内面にある何かを刺激し、潜在しているイメージの働きを活性化する作用ももっています」と述べられている（清水 2003）。つまり、玩具は対象者の中にあるイメージを表現しやすくするための道具ではなく、玩具に触れ、遊ぶことでイメージそのものが活性化され、そうしたイメージを喚起するという。また「箱庭で表現されるものは、単なるカタルシスではなく、新しい創造であることが大切である」「その表現がクライアントの理解を超えた創造性を持っている。従ってそれはクライアントを癒す力を持っている」とされている（河合 1991）。本研究は箱庭療法ではないが、生活の一場面に人形を登場させている点において箱庭と類似性があり、箱庭の拡大版とも言える。セッションでは好みの人形を選んでもらったことは、潜在しているイメージをより活性化するように作用したと考えられる。事例 1 も事例 2 も人形を本物の赤ちゃんとは認識していないが、限りなく擬人化しており、ヒト型をしていることの意味が大きい。感情表出において人形が果たした役割は、内面のイメージ化であったと考える。

もう 1 つの視点は、現実の世界への橋渡しの役割である。事例 1 は子育てをしたかった願望を人形で仮想体験し、事例 2 は人形を可愛がることで世話をする気持ちを体験している。ウイニコットは、大切なものを失った後に、移行対象は新たな世界を獲得する「橋渡し」になり、人が成人してからもさまざまな現実との葛藤に際して、現実との橋渡しとして現れると述べている（Winnicott 1979）。事例 1 は子育てをしたかった気持ちを移行し、自分の過去の姿を現実との橋渡しであり、事例 2 は関心を向けてもらいたい気持ちを、人形を世話することで満たしていたと考えられる。

また、事例において入院時に人形を媒介したことで看護師とコミュニケーションが図れた。対象から感情が発信されず、情報もない中でのコミュニケーションは難しい。そこに人形を媒介させたことで、人形に対する反応があ

りそこから看護師が気持ちを汲み取り、会話の糸口になっている。事例2は、男児をイメージすると最終的に夫への配慮の感情表出となっている。妻の感情が援助者に伝わり妻が話したい話題が可能になっている。また人形自体は何の反応も示していないが、「自分だけを見つめてくれる」など対象者の意思のままに反応を解釈している。このように人形に対してどんな働きかけでも解釈でも可能である。感情表出において人形が果たした役割は、カタルシス効果と人形の反応を自分なりに解釈して喜んでおり、これが河合のいう創造性としての効果と考えられる。

Ⅵ 今後の課題

本研究における対象は中等度認知症の高齢者であったが、人形に対する反応は認知症の重症度が関係する。そのため認知症の重症度別に関係をみていく必要がある。また、今回は人形のみ分析になったがコミュニケーションを媒介する「モノ」には写真やぬいぐるみ、アニマル、ロボットなど様々なものがある。媒介させるものの特徴と反応の共通性や相違点を明らかにしていきたい。データは認知症高齢者の心理や感情であるが、それを本人に確認することは難しく観察と分析に頼るしかない。従って、客観性を担保して研究の精度を高めるために、事例数を増やしデータ収集方法と分析の信頼性と妥当性を高めていくことが重要である。また、脳の働きなど自然科学的視点と関連させて検討する必要がある。

Ⅶ 結論

本研究では、先行研究では明らかにされていなかったコミュニケーションの特徴として以下の点の重要性が示唆された。第一に、赤ちゃんのイメージにつながる形態の人形は子育てに関する深層心理を顕在化させ援助者に伝達された。人形に名前を付けることで自分の人形になり感情表出が豊かになった。第二に、言語的コミュニケーション機能が低下した場合、身体接触は言語を補足する意味を持ち、人形と身体接触することは他者との関係性を持つことにつながる。第三に、視線が合うことが重要であり、人形は開眼している方が好まれ、ECを促す効果が期待できる。第四に、感情表出の上で同じ言動の繰り返しの重要性が示唆された。感情の伝達に人形が果たした役割は、イメージの具体化と自分の欲求を人形に移行して現実世界への橋渡しをすることにあった。

謝辞

本研究にご協力いただいた皆様に深謝いたします。

参考文献

- Fromme, D.K. & Schmidt, Affective role enactment and expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 413-419, 1972
- 橋本真, 野崎治男: 現代社会学, ミネルヴァ書房, 1981
- 原田弘恵: 高齢で軽度の認知症と診断された入所者にドールセラピーが与えた影響, *日本ハンセン病学会雑誌*, 76 (2), 178, 2007
- 早田隆子, 大隈孝, 北村ヒロ子他: 痴呆性老人ドールセラピーによるケアの考察—子育て記憶再生による感情の安定, *日本精神科看護学会誌*, 46 (2), 576-580, 2003
- 畑野相子, 北村隆子, 安田千寿他: 認知症高齢者の攻撃性に対する赤ちゃん人形療法の効果, *滋賀県立大学人間看護学研究* 9, 21-35, 2011
- 畑野相子: 認知症高齢者にとっての人形の意味と適素材に関する研究, *滋賀県社会福祉研究* 第12号, 滋賀県社会福祉研究会, 37-46, 2010
- 飯塚雄一: 視線と感情表出の関係について, *実験社会心理学研究*, Vol.33.No.2, 147-154, 1991
- 石谷眞一: 人形遊び技法による子どものメンタライゼーションの評価, *神戸女学院大学論集*, 第39巻第1号, 21-38, 2012
- 加藤伸司: 認知症のケア, 永井書店, 88-89, 2008
- 鯨岡峻・鯨岡和子: 保育を考える発達心理学, 関係発達保育論入門, ミネルヴァ書房, 184

- Leah Bisiani・Jocelyn, Angus: Doll therapy: A therapeutic means to meet past attachment needs and diminish behaviours of concern in a person living with dementia—a case study approach, *Dementia* 12 (4), 447-462, 2012
- 室伏君子:メンタルケアの実際的原則, 老年期痴呆診療マニュアル, 日本医師会, 127-133, 1995
- 永幡香苗:ドールセラピー—ドールセラピーの導入によってユニットの変化が明るく変化, *ジビエネット*, 50 (11), 47-49, 2004
- 日本認知症ケア学会編: BPSD の理解と対応, 2011, 106
- 親松恵子, 畑野相子, 山根寛: 認知症高齢者が人形を抱くことの意味, *精神認知と OT*, 2006
- 芹沢隆子:心を活かすドールセラピー, 赤ちゃんの人形療法, 出版文化社, 2003
- Tom Kitwoot, 高橋誠一訳: 認知症のパーソンセンタードケア, 筒井書房, 2006
- 塚崎京子, 無藤隆: 保育現場における3歳児の身体接触の変容, *乳幼児教育学研究* 13, 13-25, 2004
- Winnicott DW, 橋本雅雄訳: 遊ぶことの現実, p1-35, 岩崎学術出版社, 1979, Vol.2, No4, 2005
- 山根寛: 作業療法における「つたわり」—言葉を越えたコミュニケーション, *作業療法* 16 (5), 360-367, 1998
- 山根寛: 伝えるコツ—つたえ・つたわり, 「ひとと作業・作業活動」, 三輪書店, 128-136, 1999

Baby Doll Mediated Communication with Elderly People with Dementia: Analysis of Behavior in a Session

HATANO Aiko

Abstract:

The purpose of this study is to identify the effects of baby doll therapy on emotional expressions of the elderly with dementia. Two women, who were residing in a facility for the elderly, were selected as participants for the study and their responses to a doll were observed. Analysis of the observational data demonstrated that baby doll therapy increased their positive feelings while it decreased their negative behaviors. It aroused their feelings for childrearing, compassion for others, and even a sense of responsibility as mothers, while it reduced their aggressiveness. For instance, the first woman, who treated the doll like her son, was quite pleased by making eye contact with the doll, as she felt that the doll was only looking at her. She murmured her long-cherished desire for childrearing during the therapy. The second woman also repeatedly acted as if she was looking after a real baby and expressed feelings for her husband and her daughter. We also identified two factors facilitating their positive emotional expressions. First, physical and eye contact helped them to compensate for deficiencies in their verbal ability. Second, arousal of reminiscences of past child-rearing experiences or desires seems to be connected to the doll's form.

Keywords: dementia, communication, baby doll

赤ちゃん人形を媒介した認知症高齢者とのコミュニケーション ——セッション場面における言動——

畑野 相子

要旨:

本稿は、認知症高齢者に対する赤ちゃん人形（以下人形とする）を媒介したコミュニケーションの実践例を記録し、その特徴を明らかにするものである。

対象は施設に入所中の攻撃的な高齢者2事例とし、対象が好んだ人形を媒介したコミュニケーションの実際をデータとし、その過程を分析した。

事例1は、人形を男児に見立ててかわいがった。視線を合わせ「自分だけを見てくれる」と喜び、子育てをしたかった願望をつぶやいた。事例2は、実子のイメージにつながる人形を選び、抱き、世話をする言動を繰り返し、夫や娘への感情を語った。2事例とも攻撃性が消失した。この過程において子育てに対する思い、他者への優しさ、役割意識などの感情が伝達された。感情表出を助けるものとして次のことが判明した。第1は人形との接触とまなざす行為が言語を補足する意味を持つこと、第2は子育ての疑似体験の繰り返しが重要で、それには人形の形態が関連することである。